

あるといった所以である。)

智を神の wisdom (超越知) から區別せしむるものは佛教思想史に於て現われた慧の内在性に外ならないのである。慧の内在性的根據なくしては眞宗の佛智はキリスト教の wisdom と何らの相違も持てない。

### かくて慧 (prajña)

の内在性の追及こそが Orientforschung

(東洋學) の理念である。東洋の學はこの慧という歴史的背景に於て成立している。「學」ということはドイツ語のヴィシェンシャーフトであつてはならない。ヨーロッパでもその時期はギリシヤ・ローマに封じこめられてしまった。東洋の學は「明哲の學」であり又、眞宗學に對決する哲學は東洋に於ける明哲の學であつて西洋哲學ではない。問題は東洋という足下に横わる。西洋哲學と眞宗學との比較研究は見當違ひの古い仕方である。少くともヨーロッパ人はそれを東洋人から期待しはしない。ノースロップ博士はそれを明白に語っている。眞宗を世界的であると言わんとすることは裏返せば西洋に對するコンプレックスに外ならない。

それ故に眞宗學を東洋學の基盤の上で育てあげておくということが世界的地平線へ進出する唯一の裝備でなければなるまい。

(以上は眞宗學への批判ではない。却つて私の希望である。

私は一九五六年一九五七ハノブルグ大學客員教授として佛教學の責任の一端を擔つた。一般留學生の持つ受動性、旅行者の自由性は味えなかつたが常に東西對決の緊張と能動性とを迫られた。從つて印度學専門を越えた眞宗學への希望もドイツに於めて芽ばえたといつて良い。これが批判でなく希望で

橋 純 孝

### 『玉葉集』所載の善信法師は親鸞か

和歌の黄金時代と呼ばれる親鸞の壯年期三十に撰ばれた『新古今集』では、その少年期十五に撰ばれた『千載集』頃から明星の如く輝き始めた西行や慈鎮が、時の一派歌人を壓して斷然歌壇の王座を占め、諸宗の高僧が愈々競うて其道に熱を上げたばかりでなく、一般歌人も益々佛教に近付き僧侶を崇める事となつて、遂に同集を矯矢とし彼の初老期六十に撰ばれた『新勅撰集』で、夫々天台宗の傳教・眞言宗の弘法、彼の入滅直後年の『續古今集』で臨濟宗の榮西の、さして名歌とも思えぬ詠作が、初めて共に宗祖の故を以つて、寧ろ作歌その事に權威付けるべく、採られているのは見遁し難い。殊にその滅後宛かも五十年に撰ばれた『玉葉集』に、淨土宗の開祖法然や其駿足隆寛等と共に其名の見ゆる善信法師は、或は我が宗祖親鸞聖人ではあるまいか、些か私見を叙べて大方諸賢の御叱正が請いたい。

元來親鸞の和歌として文献傳說口碑等に傳える物は、蓋し合して五六十首を下るまいが、就中古い文献に見ゆる詠は頗る寥々、それ等を輯めた物としては、僅かに江戸時代中期及び末期夫々祖滅後四百五十の『親鸞聖人御詠歌集』や、親鸞中心の『釋教玉林和歌集』がある位で、共に卅餘首を載せ、近く數多い『全集』等にも殆んど收めて居らず、研究論文もほぼ皆無に近い。詠作順に見て、先ず頗る人口に膾炙している「明日ありと」の

歌にしても、その古い出據は詳かでなく、存覺作夫々祖滅後九十年九十二年と云う『親鸞聖人正明傳』や同『祕傳鈔』に載せる正治二年慈鎮和尚の使者時廿八歳として詠進、殊の外歎感を賜わつたと云う「はし鷺の」の作など歌調は仲々立派で、またその榮譽が反つて聖人遁世の縁となつたあるのは面白いが、兩書は寧ろ偽作の聲が高い。越前有乳山・越後鳥屋野の詠や、良覺の『至徳記』廿年餘祖滅後百所載の「柿崎に」の歌を初め、上野の四辻・常陸の小島三月寺の詠や、『蓮如上人御一代聞書』類祖滅後百五十三年と二百卅七年に見ゆる「鳥邊山」「世の中に」の歌などはまだしも、その他は到底信をおき難い様で、晩年の作と覺しい物の見當らないのも特に注意を惹く。

さて、『玉葉集』所載の和歌とは

二條院の讃岐、伊勢國にしる所侍りけるに、わづらひあるに依りて、鎌倉右大臣に愁へむとて、あづまくだり侍りけるに、本意の如くなりて歸りのぼり侍りければ、申しつかはしける

善信法師

をはただのいただの橋のとだえしを踏直しても渡る君哉

とあるもので、二條院讃岐と云えば、かの平清盛の專横遂に世の反感を招くを見て、源氏再興の烽火を擧げた源三位頼政の息女で、父子夫々『詞花集』『千載集』以降有數の歌人であり、『玉林集』では依つて『善信とは別人也』と簡単に排除しているが、親鸞の母は源氏の出で頼政とは共に満仲五代の裔に當り、彼の舉兵の際父有範卿も宇治に近い三室戸に籠り一致の行動を執つたため、事敗れ一家離散親鸞は其の憂目に逢つたとさえ謂われている。而かも吉水以來常隨の門弟西佛親鸞五十九歳の仁治二年八十五歳没

も、嘗つて頼政舉兵に呼應して興福寺の返牒を執筆、危く誅を遁れ源行家次いで木曾義仲の軍師となり、その沒後親鸞に歸依した人、また晩年常隨の門弟で末々まで本願寺の家從となつた下間家の祖蓮位は、もと常陸下妻居住の兵庫守宗重とて亦頼政の玄孫に當り、實朝の弑逆直後同族頼茂頼政孫の謀反に連坐し、將に處刑されんとした處を聖人の請託に依つて助命され入門した人と謂い、寧ろその關係因縁の深さを想わしめられる。

また或論者本多辰次郎氏は、これを承元の法難親鸞丹直前京都での贖答と見てゐるが、鎌倉右大臣とある以上、實朝が右大臣となつた建保六年十二月二日から、殺逆された翌年正月廿七日へかけての事と見るべく、親鸞正に四十八、九歳もはや常陸稻田の草庵を本據に行化數年、時には鎌倉邊りまで其歩を運んでいた頃の事と覺しい。且つ聖人を迎えしめた稻田九郎頼重の養父宇津宮彌三郎頼綱承元の法難前後法然門下に入り、親鸞八十七歳の正元々年八十八歳没や其一族が、代々下野・常陸の要所を領し、頼朝が關東に起つてからは夫々功あつて各地に封ぜられ、或は殊寵を蒙つて鎌倉に在つたと共に、亦擧げて親鸞に歸依していくらしい事は、その訴訟に何等かの便宜を齎したかも知れない。

他方、本集直前の『續拾遺集』『新後撰集』後の『風雅集』にもに既に親鸞の曾孫如圓次信上人、渠前、本集後『新千載集』に同曾孫覺如宗昭、沒後八年が入集しているばかりでなく、『新後拾遺集』には『歎異鈔』の作者に擬せられる門侶唯圓のも採られて居る様で、『續古今集』所收の遺圓夙に是入西房とは別人か、それらの集が凡て前述宇津宮彌三郎頼綱の女婿爲家乃至その直系の撰にかかり、必ず彼頼綱遺生のも入つてゐる事などに『新勅撰集』以後多く入集を思い合わせると、其師法然

や畏友隆寛と共に載せられているこの善信法師を親鸞と見ても別段支障はなさそうで、宛かもそれが聖人滅後五十年に相當する所に、寧ろ何か特に理由がありそうで、さすが代々漢詩文と共に和歌をも好んだ日野家に生れ、七歳の冬から『萬葉集』を読み『古今集』を暗んじたと傳え、殊に『詞花集』『千載集』の作者として聞えた伯父範綱卿に育てられ、歌聖慈鎮和尚の嘗つての門弟として『防海毎認』に記す、定家が歌道の嫉妬から元久三年親鸞<sup>時四歳</sup>をして攝政良經<sup>九條兼實房の母</sup>を天井に伏して刺殺せしめたとあるのは到底信じられないが、その歌詞も頗る優れている。

尤も、これは單なる贈答歌であるが、翻つて親鸞の和歌として傳える物の中、概して畫讀など釋教的な詠ほど調子が低く平板で、四辻や鳥邊山の歌を初め柿崎や小島の狂歌など、寧ろ軽快な作の方が或は真作の様に思え、晩年の作らしい物の無い所などから看ても、渺くとも一部蓮如も認めていた如く、歸洛頃までの時期に於いては、感興が湧けば時に若少期の素養がおのづから和歌となつて迸り出たのではないか。晩年期歸洛後や日數を経、法然門下の人々までが過去の夢を慕う南都北嶺の僧徒の跡を追い、競うて朝紳に交わり和歌に熱狂する淺間しさを見て、己が領解を幾多の著述に自らの法悅を庶民的な今様振りの和讀に全托するに至るまでは。(なお普通社『しんらん全集』卷十所載の拙稿「日本文學史上に於ける親鸞」參照いただければ幸甚)

## 善光寺如來和讀

森 西 洲

善光寺如來和讀には「善光寺ノ如來ノ、ナニハノウラニキタリマス。疫癘アルヒハコノユヘト、守屋ガタグヒハミナトモニ、ホトヲリケトゾマフシケル、ヤスクス、メンタメニトテ、ホトケト守屋ガマフスユヘ、トキノ外道ミナトモニ、如來ヲホトケトサダメタリ」とある。此の理由であろう、祖師の著書中にはホトケの語が全くない。阪東本に「佛」にホトケと假名付けたのが一箇所あるが、一見して後人の筆である。御草稿和讀に同様の所が二箇所あるが、之も恐らく後人の筆であろう。御左訓にはホトケの語が多い。之は果して祖師の筆であろうか。大いに疑問である。

玄智の考信錄には、真宗法要撰集の際、僧樸は、左訓のホトケの語を後人の加筆として削除しようと主張したが、泰巖が、蓮師にホトケの語が多いという理由で、之に反対し、遂に削除しなかつたといつてゐる。僧鎔の悲歎讀略註には「今家御文章ノ中ニ阿彌陀ホトケトノタマエルコト多シ。コレ祖訓ニ戻ルトヤゼン。答テ云ク、タゞ御文章ノミナラズ、圓光大師ノ御法語ニモ數多コレアリ、タゞヨレ方俗ニシタガイテ、ヤスクキヨエシメン爲」とある。之は苦しい辯解である。「方俗ニシタガイ」たる蓮師を立てれば、方俗に從わぬかつた祖師を貶することとなり、「祖訓ニ戻ル」ことならんとすれば蓮師を貶することとなる。こんなわけで此の問題に深入することは、僧樸泰巖